



薫り立つロマンと絢爛豪華なる音画



TAKAMATSU
SYMPHONY
ORCHESTRA
Since 1951

高松交響楽団

第109回定期演奏会

2012 **11.18** 日

— 開演14:00 (開場13:30) —

香川県県民ホール 大ホール
[アルファあなぶきホール]

皆様、ようこそ越し下さいました。

109 回となる今回の演奏会では、薫りたつロマンに満ちた、ブラームス円熟期の傑作「ピアノ協奏曲第 2 番」、そして、ロシア国民学派 ムソルグスキーのピアノ曲を、巧みな管弦楽法で知られるフランスの作曲家 ラヴェルが絢爛豪華なオーケストラ曲に編曲した「展覧会の絵」を演奏いたします。

指揮者には当団は初めてとなります田久保裕一氏をお迎えしました。氏は国内外のプロオーケストラでの幅広いご活躍はもちろん、全国のアマチュア団体の育成にもご尽力されております。ピアノ独奏には、2010 年に開催された第 2 回高松国際ピアノコンクールにおいて、第 2 位入賞（日本人最年少ファイナリスト）を果たした、石村純さんをお迎えしました。彼女の若い才能溢れるピアノにもご期待下さい。

本日は最後までごゆっくりお楽しみください。

Program

プログラム

ピアノ協奏曲 第 2 番 変ロ長調 作品83 (J.ブラームス)

Konzert für Klavier und Orchester Nr. 2 B-dur op. 83 (Johannes Brahms)

- I. Allegro non troppo
- II. Allegro appassionato
- III. Andante
- IV. Allegretto grazioso

～ Pause ～

組曲「展覧会の絵」 (M.ムソルグスキー／M.ラヴェル編)

Tableaux d'une exposition (Modest Mussorgsky/Joseph-Maurice Ravel)

- 1. プロムナード
- 2. 小人（グノーム）
- 3. プロムナード
- 4. 古城
- 5. プロムナード
- 6. テュイルリーの庭 - 遊びの後の子供たちの口げんか
- 7. ビドロ
- 8. プロムナード
- 9. 卵の殻をつけた雛の踊り
- 10. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ
- 11. リモージュの市場
- 12. カタコンベ - ローマ時代の墓
- 13. 死せる言葉による死者への呼びかけ（プロムナード）
- 14. 鶏の足の上に建つ小屋 - バーバ・ヤーガ
- 15. キエフの大門



ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調

ブラームスは、生涯のうちに2曲のピアノ協奏曲を残していますが、第1番が青年時代に書かれた作品であるのに対して、この第2番は円熟期の48歳のときの作品です。

この曲を作曲した年、ブラームスはイタリア旅行をしており、寒冷な北ドイツに生まれ育った彼は、明るく暖かなイタリアで大きな感激を覚えたのでした。その時の経験が、伸びやかな楽想となって、この曲に色濃く反映されているようです。

この曲が、従来のピアノ協奏曲と一線を画する点は、「ピアノ協奏曲」というよりは、「ピアノとオーケストラによる交響曲」という発想で書かれているということです。ピアノパートは、古今のピアノ協奏曲でも屈指の高い技巧を求められるのですが、それを誇示しすぎることなく、「オーケストラと一体となって」音楽を繰り広げます。また、チェロ、ホルンなど、ピアノ以外の楽器にも印象的な独奏が出てきます。楽曲構成も、協奏曲の定番構成である3楽章構成ではなく、交響曲のそれである4楽章構成となっており、演奏時間は50分に迫る、スケールの大きな楽曲です。



J. ブラームス
(1833 - 1897)

第1楽章 静けさの中にも大きな広がりを感じさせるホルンの独奏（第1主題）から楽曲は始まり、ピアノが、泉の湧き上がる様な音型を奏してそれに優雅に答えます。いかにもブラームスらしい、ロマンの薫りたつ開始です。その後、奮起する様にピアノが演奏をはじめ、第1主題の、力強いオーケストラによる全合奏を導き出します。それが次第に落ち着いたところでヴァイオリンが表情豊かに歌う短調のメロディが第2主題です。飛び跳ねる様な男性的で逞しいリズムが印象深い結尾部を経て、オーケストラ主体での主題の提示を終えると、今度はピアノ主体で、主題の再提示が行われます。再提示は、オーケストラ主体の時とかなり形を変えており、まるで展開部のようにヴァリエーション豊かですが、本来の展開部は、オーケストラの強烈な全合奏を合図に始まります。展開部以降も、ピアノとオーケストラが対等に渡り合い、各主題も一層様々な表情を見せてくれます。ホルンが、冒頭と同じく静かに鳴り渡ると同時に、再び音楽は雄大な雰囲気を取り戻して、主題の再現を経て力強く楽章を結びます。

第2楽章 通常の3楽章構成のピアノ協奏曲とは異なり、ここにスケルツォ楽章が挿入されます。冒頭にピアノが奏する、暗いがきびきびとした第1主題と、対照的に、不安げに揺れ動く様な第2主題から楽章は構成されています。中間部では鐘の音の様な快活な響きも聴かれます。スケルツォとは、本来「冗談」の意味で、気軽に聴ける楽しい音楽のはずなのですが、この楽章は、舞曲風の歯切れの良いリズムにその名残をとどめるにすぎず、熱い情熱を秘めたパワフルなものになっています。内容もとても充実しています。ブラームスは、友人に宛てた手紙で、この楽章を指して「とても小さなスケルツォ」と書いたそうですが、むしろ、「スケルツォ」なのはその手紙の方でしょう。

第3楽章 前の楽章とがらりと変って、チェロの独奏が、心安らぐような息の長いメロディを静かに奏ではじめ、オーボエも加わって対話をします。この間、ピアノはずっと沈黙しているのが極めて特徴的です。ひとしきり主題を歌い終わった所から、1音1音噛みしめるようにピアノが再登場します。ここまでオーケストラのみで奏でられた暖かい世界を、「ピアノで無ければできない表現」で引き継ぎ、さらに新たな繊細な楽想も加えていきます。そして、主題を変形させた幾分劇的な部分や、クラリネットのハーモニーが天上の音楽の様に美しい中間部を経て、冒頭のチェロ独奏が再帰し、今度はピアノも加わり清らかなトリルで美しく装飾しつつ、夢見る様な気分のうちに安らかに楽章を終えます。

第4楽章 この大協奏曲の締めくくりは、さぞや壮大な音楽かと思いきや、意外にも、リズムカルで可愛い音楽となっており、聴き手はいい意味で肩透かしをうけるのではないかと思います。この楽章では、ブラームスのイタリア旅行の影響が特に反映されているといえるでしょう。一方、ブラームス本人が意図したのかどうか定かではありませんが、独特なアクセントのリズムや、ピアノが軽妙に鍵盤上を駆けまわるあたり、少しだけ「ジャズ」の様なテイストもあります。しかめっ面のイメージの強いブラームスが書いた、イタリアの日差しのように明るい、にこやかな音楽。しかし、そんな明るさの中にも、ブラームスの音楽ならではの「気品」や少しの「憂い」をも併せ持つ素晴らしい終曲です。

Program note

組曲「展覧会の絵」

この曲は、ロシア国民学派の作曲家ムソルグスキーの代表作で、原曲はピアノ曲です。彼にはガルトマンという建築家・画家の親友がいましたが、ガルトマンは、不幸な事に、若くして急逝してしまいます。ムソルグスキーは、悲しみをこらえつつ、後日開かれた彼の追悼展に足を運びました。夢に終わったデザイン画や設計図…、これらを見たムソルグスキーは、友の完成できなかった作品を、自分なりの方法「音楽」で完成させてあげたい、と考え、この曲を作曲しました。それは、独創的な楽想、大胆な和声とリズムに富んだ魅力的な曲に仕上がったのですが、ムソルグスキー自身がピアノの演奏に精通していなかったためか、著しく高い演奏難易度の割に演奏効果が上がりにくいという難点があり、よほどの名手ピアニストで無ければ、まともに聴かせるのが難しく、この曲は埋もれた名曲となってしまっていました。

しかし、後の作曲家達が、この魅力的な楽曲をオーケストラ曲として世に出そうと試みます。その中の一人に「オーケストラの魔術師」と謳われたフランスの作曲家ラヴェルがいました。彼の緻密かつ色彩的で大胆な編曲によって、この曲に、絢爛豪華なオーケストラ楽曲としての新たな命が吹き込まれ、押しも押されぬ有名クラシックの仲間入りをしたのです。



M. ムソルグスキー
(1839 - 1881)



M. ラヴェル
(1875 - 1937)

この曲の元になった絵画には、現存せず散逸してしまったものもありますが、今でも残っているものを紹介しつつ、各曲の解説をしたいと思います。

1. プロムナード トランペットのファンファーレで始まります。「プロムナード」とは展示室を結ぶ回廊のこと。次の展示室へと歩くムソルグスキー自身の姿と心情を表現した、いわば、「ムソルグスキーのテーマ」です。

2. 小人(グノーム) 小人風の妖怪の絵。妖怪が、ついたての向こうから顔を出したり引っ込めたりしています。原画は、いささか可愛らしさも見受けられますが、音楽の方は、威嚇的でグロテスクです。友を失ったムソルグスキーのショックが、妖怪の絵にオーバーラップしたのかも知れません。



2. グノーム

3. プロムナード 冒頭と同じメロディが、今度はホルンや木管により繊細に演奏されます。心穏やかに友の事を思い出しているようです。

4. 古城 イタリアの古城の絵。人々が集うにぎやかな城の前で、吟遊詩人が歌っている歌は、対照的な、もの淋しい歌です。詩人の歌は、この曲だけに登場するサキソフォンのソロにより演奏されます。



4. 古城

5. プロムナード 再びトランペットのファンファーレが響き、重厚な雰囲気が醸し出されます。壮麗な城の絵を見た後の気持ちでしょうか。

6. テュイルリーの庭 - 遊びの後の子供たちの口げんか テュイルリとはパリにある小さな公園の名前。そこで子供たちが走り回り、戯れている絵です。そして些細なことからけんかとなりますが、見かねた親が家に連れて帰り、呆気ない幕切れとなります。



6. テュイルリーの庭

7. ビドロ ビドロとは「牛車」の意味。鈍重な牛の動きが、チューバ(ユーフォニアム)のソロで描写されます。なお、現在、該当する牛車の絵は見つかっておらず、「ビドロ」という言葉には「苦しみ」という意味もあることから、虐げられた民衆の絵だったのではないかという説もあります。

8. プロムナード 前の絵を見て悲しい気分になっている様です。そんな中、次の絵にふと目を奪われます。

9. 卵の殻をつけた雛の踊り ガルトマンが手掛けたバレエの衣装デザイン。卵の殻から抜けきれずに跳ね回る雛鳥とそれを見て慌てる親鳥とのやりとりを表しています。低音楽器はほとんど使われず、高音域のみのアンサンブルによる可愛らしい音楽です。



9. 卵の殻をつけた雛

10. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ 大富豪「ゴールデンベルク」と貧乏人「シュムイレ」の絵。借金の返済を迫るゴールデンベルクに、支払いの延期を懇願するシュムイレ。話は並行線のまま、最後はゴールデンベルクの一喝。そんな光景が思い浮かぶような曲です。



10. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ

11. リモージュの市場 舞台は再びフランスへ。フランス中部にあるリモージュの街の市場。にぎやかな喧騒の中で、物売りのおばさんの売り声や他愛もない世間話があちこちから聞こえてきます。

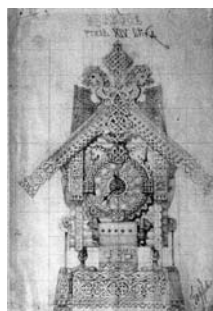
12. カタコンベ - ローマ時代の墓 地下墳墓でカンテラを持つガルトマン、その横には山積みのドクロという不気味な絵。それが金管楽器の和音の変化のみで描かれ。やがて曲想は静かになり切れ目無く次へ続きます。



12. カタコンベ

13. 死せる言葉による死者への呼びかけ（プロムナード） プロムナード主題が静かに流れます。ムソルグスキーが、亡きガルトマンと言葉を交わそうとします。

14. 鶏の足の上に建つ小屋 - バーバ・ヤーガ メンドリの足をもった奇妙な小屋に住んでいるロシア伝説の魔女「バーバ・ヤーガ」その魔女のすみかをモチーフにした時計のデザイン画です。時計から魔女が飛び出し、ほうきに跨ってダイナミックに飛び回る様な音楽です。そして曲の勢いは衰えることなく、終曲へなだれ込みます。



14. バーバ・ヤーガ

15. キエフの大門 ガルトマンが遺した、門の完成予定図を元に作曲された終曲です。金管楽器が力強いコラールを奏します。ガルトマンを追悼する様な讃美歌風の部分を挟み、作曲者自身のテーマ（プロムナード）も鳴り渡り、ラストは絢爛豪華な全合奏となります。友が想い描いた、黄金に輝くキエフの門。それはここに音楽として完成したのです。



15. キエフの大門



指揮 田久保裕一 *Yuichi Takubo*

東京学芸大学音楽科卒業。指揮を伊藤栄一、伴 有雄、汐澤安彦、秋山和慶、リヒャルト・シューマツヒャー、カール・エスターライヒャー、湯浅勇治、ハンス・グラーフの各氏に師事。'94年、第4回「ディス・ニクレスク」国際指揮者コンクール（ルーマニア）グランプリ・審査員特別賞・聴衆特別賞受賞。'99年、彦根第九オーケストラおよび合唱団を率い、ベルリンのSFB大ホールにて、ベートーヴェンの第九交響曲を演奏、成功に導く。'02年内蒙古民族歌舞劇院交響楽団の「名誉客演指揮者」の称号を受け、その後も客演を続ける。'10年、ウィーン楽友協会大ホール「第九演奏会」にて、ベートーヴェン生誕240年記念オーケストラ、合唱団を指揮し成功を収める。'11年9月11日、ニューヨークのリバーサイド大聖堂にて、東日本大震災と9.11の追悼演奏会を開催。モーツァルトのレクイエムを指揮し、現地から絶大な称賛を受ける。これまでに国内の主要オーケストラを指揮。また全国のアマチュア団体の育成にも尽力、エネルギーで熱い人柄で、行く先々で音楽ファンをふやし、地域文化の活性化に一役買っている。また全国各地で指揮法講座も数多く開催。日本指揮者協会会員。



ピアノ 石村 純 *Jun Ishimura*

'02年、第26回ピティナ・ピアノコンペティション 全国決勝大会F級金賞受賞。'07年、第2回東京芸術センター記念ピアノコンクール 金賞及び東京芸術センター記念賞、感動賞受賞。'08年 リッチ・ファウンデーション・アワード 優勝。同年、第54回マリア・カナルス国際ピアノコンクール 第3位入賞。併せて最年少ファイナリストに贈られる特別賞を受賞。'10年、「第2回高松国際ピアノコンクール」第2位（最年少ファイナリスト）及び財団法人高松観光コンベンションビューロー理事長賞受賞。'12年、「英国王立音楽大学ベートーヴェンピアノコンクール」優勝。日本、ロシア及びイギリスをはじめとする、ドイツ、スペイン、イタリア等のヨーロッパ各国にて多数のリサイタル、音楽祭に出演、またオーケストラとも共演。これまでに、エレナ・アシュケナージ、ケヴィン・ケナー、故岡岡優子、ディーナ・パラキナの各氏に師事。'11年、英国王立音楽大学を、ABRSM（英国王立音楽検定協会）の全額奨学生として首席で卒業。現在、同大学大学院に在籍、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として研鑽を積む。



コンサートマスター 福崎至佐子 *Hisako Fukuzaki*

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巖本真理、故 岩崎洋三、ボヤン・レチェフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレーラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレーラー氏と弦楽四重奏を組みTV、FM東京、CM、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985年、高松に帰郷し、ゴールドブレンドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メサイア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学発達科学部教授。香川大学教育学部講師。かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成13年度「香川県教育文化功労者表彰」、第42回「四国新聞文化賞」、平成16年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第67回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成21年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。2011年1月、日本クラシック音楽協会第20回優秀指導者賞受賞。

管弦楽 高松交響楽団 *Takamatsu Symphony Orchestra*

1951（昭和26）年8月、故 緒方益園氏が県内の有志を募って創立。同年11月香川県公会堂において第1回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を灯す。爾来、半世紀以上に亘る活動が続け、昨年（2011年）創立60周年を迎えた。100回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館20周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演（2008年）、サンポートホール高松開館5周年記念「カルミナ・ブラーナ（パレエ付き）」公演（2009年）をはじめ、オペラ・バレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001年に迎えた創立50周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高響団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには2001年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ（KJO）」、2003年1月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ（MCO）」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008年、香川県より栄えある第1回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約150名。